

## ■□ 名古屋陶磁器会館 1932年（昭和7）



象牙色の施釉スクラッチタイルを全面に張ったファサード。要所にはコンクリートによるテラコッタが設置されている。



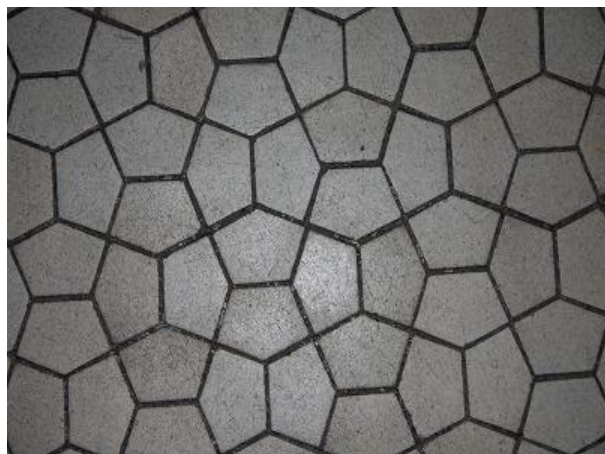
建物の側面コーナー部にはR平を使い躯体の丸味を伝えている。



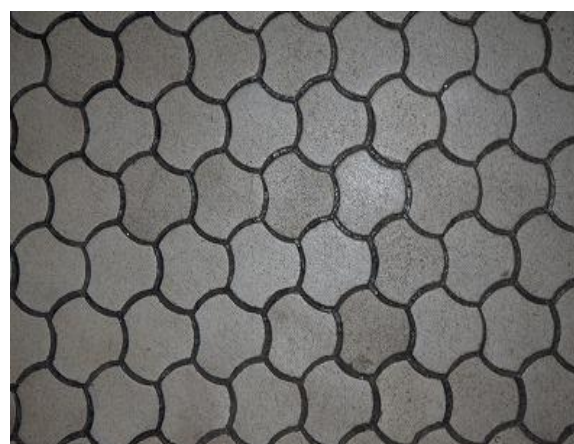
バルコニーの底部の周辺部もR平を使って丸味を持たせてある。縦目地は目立たないようにタイルと同じ白い目地が入り、水平目地は灰色で際立たせている。帝国ホテルのスクラッチ以来の共通の目地仕様になっている。



このタイルのスクラッチ面は、その引っ掻き跡のいわゆる「ワラビ」の穂に当たる部分のボリュームが大きく、釉薬でその危うい強度を補完している。



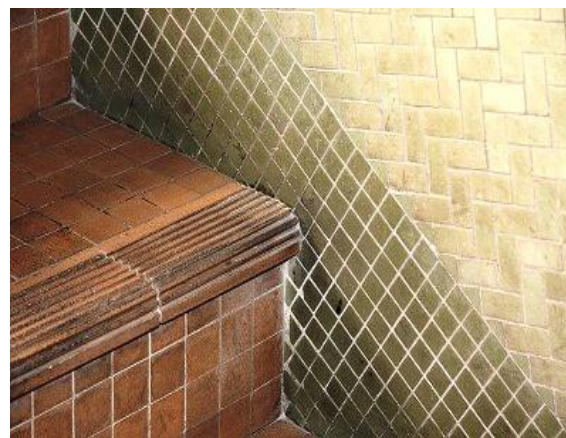
正面玄関の床に張られた「ダイヤ」と呼ばれた伊奈製陶製のモザイクタイル。5角形4つで大きな6角形を表現している。



1階大廊下に張られた「モンキー」と呼ばれた伊奈製陶製のモザイクタイル。正六角形のモザイクタイルからの派生形。対角最大長：40



1～2階踊り場の床と腰壁のモザイクタイル張り。腰壁タイルは手摺に平行に張られ、中間部は網代張り。上端下端部が18×18（6分角）、中間部は18×36（6分二丁）、写真の床タイルは後年張り替えられたもの。



2～3階の階段のタイル張り階段（創建時のまま）。床面のタイルは36.5×36.5（1.2寸角）、段鼻は152×77×28、山8本、谷9本の筋付。

#### 【特 徴】

木造建築でいながら、ファサードはタイル張りにし、西洋風の印象を求めたと思われる。スクラッチタイルが大流行した時代で、材料を確保するのも難しかったのではないか。18mm厚の重いタイルを木造下地に張るのも技術を駆使したと思われる。また1階から2階の軒下まで通しで張られたタイルの重量を地面につながる基礎の上ですべて受け止めて安定するなど合理的なタイル張りデザインとなっているのが特徴。